

NALU

The Longboarder's Magazine

9.2008 No.

66



特別付録

DVD



The Endless Summer
Tribute

今、目指すのは
'60s
サーフスタイル!
Viva Sixties!

History, Adventure, Charisma,
Vintage Board, Surf Movie, Photo Session,
Surf Music, Neo '60s,
Surfer's Vehicle,
Discover Japan in '60s...



特別価格 **1300yen**
偶数月10日発売

13 世紀のスコートタイ王朝以来、何世紀にも渡り王国としての尊厳を貫き通すThe King of Thailand.面積は日本の約1・4倍とさほど広くはない。
がしかし、蘭の花が咲き乱れる熱帯特有の豊かな自然と近代国家としての歩みが調和する王国が内包するエネルギーは、日本のそれを遙かに凌いでいる。アジアの穀倉地帯として内陸的なイメージを抱きがちなタイだが、インド洋や東シナ海に浮かぶリゾート・アイランドのクオリティーの高さは、欧米人の間で古くから評価されてきた。中でも隣国シンガポールとはほぼ同じ面積を有するタイ最大の島プーケットは、古代からインドと中国を結ぶシ



乗り島へ。



ラインの要所として、多くの貿易船が立ちより賑わいをみせていた。そして今、アンダマン海に浮かぶクラシックなリゾート・アイランド、プーケットは波乗り島として、世界中から波乗り族という新種のゲストを迎え、新たなステップを踏み出そうとしている。

そんなプーケットが放つ、貿易風にも似た心地良いバイブレーションに魅了され、首都バンコクから1時間15分のフライトをこなし、島を訪れた我々は「サワディカア」（こんにちは）という語尾をこころもちあげ、鼻にかかると独特なイントネーションに迎えられる噂どりの波と仏教国らしいオーブンマインド、そして夜の街が放つ怪しく燃え上がるネオンに吸い込まれていったのだ。

プーケットのサーフ・シーズンは6月から12月だ。波乗りの島に相応しく、貿易風に運ばれたうねりはホワイトビーチやリーフに砕け散り、ライダブルな波が島のあちこちで顔を見せていたがしかし、残念ながら我々が出合った波のコンディションはベストとはいえなかった。

こればかりは、自然のなせる技、我々がコントロールできる訳もない。それでもサーファーである以上、よりベストなコンディションを探し出そうと、風を読み移動を繰り返す日々が続いたがしかし、波間に浮かぶローカルサーファーやツーリストが誰一人大声をだすでもなく、とびつきの笑顔で波と戯れている。波のコンディションがどうであれ、彼等は一様に波に乗ることを心から楽しんでた。

そんなハッピーなバイブレーションに触れた僕は、はじめて波に乗ったあの夏の楽しさを思い出すにはいられなかった。

コップン・クラブ（ありがとう）。



タイ・プーケット

アンダマン海の波

マレー半島の付け根、アンダマン海に浮かぶ“涙”のような形をした小島、プーケット。世界でも指折りのリゾート・アイランドとして知られるが、今、世界中のサーファー達の注目を集めているという。この島の魅力を現地に暮らすサーファーのライフスタイルから、探してみたい。

文=江本陸 Text: Riku Emoto
写真=三浦安閑 Photos: Yasuma Miura
取材協力=タイ国政府観光庁、
タイ国際航空、デイトライン





CASE.2

ポケットに魅せられた
ウェーブ・ハンター

スティーブ・マーティン

Steve Martin

長年ハワイで鍛えただけあって、スティーブはパワーサーフィンがお得意の様だ

サーフジャンキーならずとも、サーフィンを嗜むものにとつて誰もが憧れを抱き、時には嫉妬さえ覚えてしまうであろう、サーフィンの本場ハワイ諸島のビッグアイランド。そんな宝石箱の一角に飽き足らず、アジアンリゾートの至宝の一つといわれる、ポケットへ移り住んだ一人のウェーブ・ハンターがいる。スティーブ・マーティン、46歳だ。

ヨーロッパにルーツを持ち、オハイオ生まれの彼は、生粋のハワイアンではない。がしかし、幼いころ両親に手を引かれ、ビッグアイランドへと住まいを変え、やがて15歳を迎えた彼は後の人生を決定づける、心の源となるサーフィンと出合ったという。

こうしてスティーブは、リアル・ハワイアンに勝るとも劣らぬサーフスピリットを自身の身体に埋め込み、確実なものとしたのだ。常にサーフィンと仕事のバランスをキープするライフスタイルを送っていたスティーブだったが、あまりにも混雑し始めたハワイでのサーフィンにこと疲れ、何とも贅沢な話ではあるが、パラダイスからの脱出を模索し始めたのだ。



大学院での研究が忙しく、久しぶりのサーフィンに思わず笑顔のスティーブ



1



2

1: 波と素敵なガールフレンドを手に入れた、ウェーブ・ハンター、ステイブはブーケットでのスイートライフを満喫中 2: 学者の顔を持つステイブのデスクはそれに相応しく、ハイテク機器とアジアを中心とした世界地図が満載なのだ



未知なる波をチェックするステイブの顔は、インディー・ジョーンズそのものだ



以前からアジアに住む山岳民族に興味を抱いていたステイブは、一大決心の末、学位取得のため台湾の大学への留学を果たしたのだ。そして今年に及ぶサーフビジネスをはじめ、様々な職業経験をもとにブーケットのプリンス・オブ・ソングラー大学の大学院でツーリズムに関する博士号取得を目指し、日夜研究に没頭している。

ステイブの研究課題は、なんと東南アジアに点在する波を様々なデータを駆使し科学的な分析を行い、サーフインの持つあらゆる可能性とサーフトリップで訪れた国の波、文化をしてライフスタイルを探ることだという。

ここまでくると完全なサーフジャンキーだ。しかも本気モード全開。まさにサーフィン界のインディー・ジョーンズだ。

「なぜ僕がブーケットにいるかというと、ここをアジアのサーフステーションにしたいからさ。タイはインド洋に面し、インドネシアやミャンマー等のインドシナ半島の沿岸地域へのアクセスも良く、未発見のポイントを含め、まさにサーファーにとって宝の山なんだ。ブーケットの波も悪くない。ファンウェーブがいっぱいあるし、足を伸ばせばハードなリーフ・ウェーブも楽しめるからね。それにブーケットのローカルサーファー達に僕が知っているサーフィンについての全てをシェアしたいと思っている。ローカル・コンテストにはジャッジとして参加しているんだ。それに最高のガールフレンドもいるからね」

好奇心の塊のようなステイブだが、しばらくは、このアンダマン海の小島の魅力から、逃れることができないようだ。